

研究ノート

英語のリスニング・ストラテジーに関する一考察

A Study of Listening Strategy Instruction on Japanese EFL Learners

池田 広子

要 旨

今や地球規模で動く時代に入り、日常生活の中で英語をコミュニケーションとして用いる能力が求められる。中学・高校で英語を学習してきたにもかかわらず、英語を聞いても分からない、英語でコミュニケーションができないという学生が多く見られる。TOEFLやTOEICのスコアも、日本人の平均値はアジア地域の中でもかなり低い状態が続いている。

日本人学生はなぜ英語が聴き取れないのか、聴き取れるようになるためにはどのように学習すべきかを、リスニング・ストラテジーを構築し、日本語と英語の音声の違い、英語のリスニングに必要な様々な要素、弱点と思われる要素、効果的に補強するための要素、英語の音声を聴き取るためのストラテジー、内容理解のためのストラテジーなど、リスニングの困難点や問題点を提示し、リスニング能力の向上とリスニングの効果的な指導について考察している。

キーワード：語彙力、文化・社会的背景知識、予測—検証、sound structure、
top-down processing、bottom-up processing、inter-active

はじめに

英語学習では「聴く」「話す」「読む」「書く」の4スキルが、相互に影響し合いながら総合的に向上していくことが、本来望ましいと言われる。そしてFinocchiaro & Brumfit (1983)は、外国語学習においてコミュニケーション能力を、‘the integrated skills of listening, speaking, reading, and writing’であると説明している。近年、日本の英語教育は、国際化社会という時代の変遷とともに、オーラル・コミュニケーションの重要性が認識され、ストラテジーの研究やストラテジー指導の実証研究が注目されており、コミュニケーション能力の育成が強く求められている。

コミュニケーションとは、「話し手と聞き手が互いに予想や予期する活動を行い、それに自分の伝達行為、聞き手の反応、メッセージの内容が一致するか、どうかを確めながら進めていく過程」(河野1993)である。このことからコミュニケーションは、言語そのものだけによって達成される

ものではなく、話し手と聞き手の関係や態度はもとより、両者のもつ社会的な背景や文化・時間・その他さまざまな要素に左右される。また、Vogely (1995) は、外国語学習者が自然な形の音声入力を理解しようとする場合、内容が難しくなるにつれて、ボトムアップ・ストラテジーを効果的に用いようとしていると指摘している。そして、Hardison(1996)は、リスニングと動画に関して、英語話者と非英語話者（日本語、韓国語、スペイン語、マレー語）で、唇の動きがその発話音と一致していない場合にはlistening comprehensionが劣るというマガーク効果の実験を行い、視聴覚情報が両者ともに発話理解に効果があると示している。

しかしここではまず、コミュニケーションを確立するために必要不可欠な活動の一つであるリスニングに焦点をおき、リスニングに関する諸々の要因などコミュニケーション手段としての英語について、Ⅰ．リスニングに必要な能力、Ⅱ．リスニングの困難点と問題点、Ⅲ．リスニング過程でのbottom-upとtop-downについて考察する。

Ⅰ．言語習得におけるリスニングに必要な能力

同じ情報を得るための能力でありながら、最近感じる事として、学生の多くが読む能力に比例した聴く能力を身につけておらず、初歩段階の聴き取りの練習から始めなければならない学生が少なからずいるという現状である。こうした中で、リスニングの基礎的な能力の養成やリスニング力を向上させるために必要な項目と、リスニング情報処理過程において必要な能力として次のようなことが挙げられる。

- (1) 聴こうとする意欲(題材に対する関心・興味)などの心理的なこと。
- (2) 背景知識・文化的知識などの知識的なこと。
- (3) 十分な聴力、記憶力などの身体的なこと。
- (4) 語彙力、構文・文法力(文単位) 予測・補足力(談話単位、文脈利用他)・音素識別能力(短縮、脱落他)などの言語的なこと。
- (5) 要点をメモする技能・重要語句の抽出・ストラテジーの活用などの技能的なこと。

以上の5項目がリスニングには必要な能力であると思われるが、初心者にとっては、耳に人ってくる英語の音声から文を構成する単語を拾い出し、語として認識することが非常に困難である。リスニング能力を身につけるためには、ネイティブスピーカーの発音に多く接し、英語の音に慣れる努力をすることも大切であるが、聴き取るためには基本的なこととして、一語一語を区別し、すでに文を構成する単語がmental lexiconの中に存在し、そこから取り出せる状態にあることも必要である。

Aitchison(1987)は、リスニングにおける語の正しい認識は、phonology が mental lexicon に適切に保持され、取り出せる状態にあることが必要であると述べている。そして、mental lexicon の中でそれぞれの語は、semantic-syntactic と phonological の2つの要素から成っており、meaning 及び part of speech は一要素であり、sound structure をもう一方の要素と言い換えることができると言っている。しかし、中学校・高等学校と英語を学習してきた日本人学生の学習過程を考慮するとき、sound structure と meaning 及び part of speech の他に、第3の要素としての 'spelling' についても考える必要がある。

従来の英語学習過程では、訳読や黙読に多くの時間を費やし、読解力を養成するという訳読に偏る教授法がなされてきた。訳読を教授法としてけっして否定はしないし、英語力を伸ばすには重要な教授法であると考ええる。しかしながら、こうした学習方法は、英語の習得がしばしば spelling から入ることになる。一つの文字で一つの音や意味を表わす漢字や、一つの文字で一つの音を表わすかな文字を母国語として使用している日本人学習者には、アルファベットの spelling から特定の正しい英語の音素を連想するよりも、spellingから直接意味を連想する方が容易である。つまり、spelling \longleftrightarrow meaning の結びつきは容易であるのに対して、sound structure \longleftrightarrow meaning の結びつきは難しいといえる。そこで聴く能力を向上させようとする場合、言語的能力としてあげた語の一構成要素である sound structure を考慮した語彙の形成が非常に重要であると言える。sound structure を十分意識した vocabulary building を習慣的に行うことが、リスニングの練習を行っていくうえでの第一歩であり、基礎能力を身につけることになると考える。

言語習得におけるリスニングとは、流れてきた音声表現の一語一句を正確に記憶することではない。またそれが完全に記憶できたとしても、そのこと自体にはこれと言った意味は余りない。書かれた文章を読む際には、何度も前の箇所に戻って読みかえし、確認が可能なのに対し、リスニングの過程においては、「記憶する」・「推測する」という行為を全く無視することはできない。なぜなら音声は一度流れれば消えてゆくものであり、聴きかえすことは通常不可能である。そのためにある程度のことを覚える能力や聴こうとする意欲、文化的背景知識、技能としての保持する能力、予測・推測する能力などが必要である。

II. 英語リスニングの困難点と問題点

コミュニケーションを成立させるためには、リスニングは必要なスキルであり、聞き手は、ただ単にことばの意味を理解するというに終始しては不十分である。話し手のことばだけではなく、他の手段・方法から話し手が何を言いたいのか、相手の言いたい事が何であるのかを把握し、その意図を読み取り理解できなければ十分とは言えない。また、聴く能力は、話す能力の土台となるスキルであり、言語の構造の違いなどのさまざまな要因が、日本人学生のコミュニ

ケーション能力の習得を困難にしていると思われる。

読めば理解できる英語でも、耳から入ってくる英語は理解できないとよく言われる。また、ゆっくり話せば分かることでも、普通の速さでのネイティブスピーカーの話が聴き取れず、内容が理解できない学生が多い。その一要因として、スピードの違いやポーズを置く位置がでたらめだったり、ネイティブスピーカーの発音に慣れていなかったり、英語特有の音声現象を習得していないことなどが、リスニングを困難にしていると考えられる。そこでリスニングを困難にする要因や、問題点について次に考えてみる。

- 1) 英語の音変化の識別能力不足として、英語が自然な速さで話され、発話スピードが上がると、発音上ストレス(stress)の置かれない部分(前置詞や助動詞をはじめとする機能語など)は弱形になり、音の連結(assimilation)や短縮(reduction)などの音の変化が起こる。例えば、run awayでは、runの語末の[n]と次にくる単語の語順の母音[ə]とがつながって発音されるので、「ラナウェイ」のように聴こえる。また let her go to the storeの let herは、手紙の letterのように発音される。一方、twentyのように、強勢のつく母音と強勢のつかない母音の間にある[nt]では、[t]の音が消えてしまい、「トゥエニー」のように、今まで聴いている発音とは異なった音として聴こえる。このため学生にとって、英文を読めば理解できる語でも、聴いたことのない音として聴こえ、聴き取りを困難にさせている。
- 2) 単位時間に入力される情報量の増大とポーズは、ゆっくりとポーズをおいて話される場合、聞き手は入力される音声情報を次々に処理できる。一方、自然な速さの英語では、単位時間に話される英語の量が多いため、聞き手は入力情報をすばやく処理していかなければならない。自然な英語ではこのためポーズの入る回数が少なくなり、ポーズの長さも短くなる。そもそもポーズは、そこまでに入力された情報をまとめて処理するための時間であるから、これが少なかったり時間が短いと処理が困難となる。こうしたことが自然な英語を聴くときに、すでに入力された情報を十分に処理しないうちに新たな音声情報が入力されて、パニック状態を引き起こすと考えられる。
- 3) リスニングには、基本的な語彙・構文・文法力が必要である。語彙力、文法力が不足していると音声入力情報を長期に記憶して、語彙・文法力に関する知識を適切に活用し、意味のまとまりで区切って意味を解釈していくことができない。もっともこの場合の語彙とは、単に読めば意味が分かるという‘written vocabulary’ではなく、自然な速さで発音されたときでも意味を理解できる‘spoken vocabulary’のことを意味する。
- 4) 学生が持っている、ある単語の発音に対する音のイメージ(acoustic image)は、ネイティブスピーカーのものとはかなり違いがあることが多い。例えば、circleの語の終わりにくるlは暗い[l]と音声学的に言われ、日本語のエルの音とは異なり、むしろ「サーコウ」のように聴こえる。しかし、カタカナ発音に慣れている学生にとって、「サークル」というカタカナ発音を、心的イ

メージとして持っているために、circle という語を聴いても認識できないのである。つづり字を見れば意味は理解できるが、発音を聴いただけではその語を認識できないという現象がそれである。

- 5) リスニングの苦手な学生の中には、聴く文章の一文一文を、すべて日本語に翻訳しながら理解しようとするものが多いように思う。頭の中での和訳は処理に時間がかかり、その行為を行っているうちに十分処理しないうちに、新しい音声の情報が聞こえてくる。このため和訳することでリスニングをさらに難しくし、その翻訳する行為がリスニングの障害になっている。
- 6) リスニングで重要なのが、文化・社会的な背景知識力で top-down 処理をどれだけできるかにかかる。例えば、発話中の単語や構文があまり理解できなくても、聞き手が持つ背景知識を活用しながら、分からない部分を予測して意味解釈することはできる。日本語でも逆に、専門的な分野の法律・経済・医学などの話で、ほとんど背景知識がない場合には、十分に意味を解釈できないことが多いのと同様で、背景的な知識力の不足も考えられる。
- 7) 聞き手の中には、どの情報が重要であり、どの情報がそれほど重要ではないのかという判断ができず、直面している一文一文に焦点をおき、全体の概要・要点を把握することができない学生がいる。つまり、概要や要点を把握する力が不足していて、聞き手の英語力が低いために、現在直面している文にしか注意が向かず、その文を意味処理するだけで精一杯で、全体の文脈を考える余裕がないためと考えられる。

他に母語における解釈力の不足としては、文章の枝葉末節を識別する能力が、聞き手の持つ母語の文章能力に影響していることも考えられる。母語で高い概要・要点を把握する力を持つ学生は、その能力を外国語にも転移できると考えられる。逆に、母語での概要・要点の把握力が低い学生は、外国語でもリスニングの把握が困難であることが予想される。また心理的障害としては、英語の話を聞き、続いてその話に関する質問をされた場合など、それに答えなければならないという気持ちと、その結果で評価されるという心理的な圧迫が生じて、聞き手はリラックスして聴くことができない。こうした緊張状態に陥るために 'affective filter' が高まり、リスニング力を困難にする心理的な壁も存在すると考えられる。

Ⅲ. リスニング過程のBOTTOM-UP と TOP-DOWN

聴解に至る過程は、bottom-up processing と top-down processing として考えられ、学生はこれら2つの処理の仕方を同時に、しかも相互補完的に使いながらメッセージの意味を把握していると述べている (Richards 1990)。つまりこの聴解に至る過程は、外部から入力された情報がその意味をくみ取るための情報源になり、聞き手は bottom-up processing において、ことばの流れを音の要素に分け、それをさらに単語にまとめ、単語を節に、節を文にというように、音から単語

に、単語から文法単位へとより大きな単位に処理していくのである。それに対して top-down processing において、聞き手がメッセージを理解しようとする場合には、文脈やトピックについての各々学習者が持っている知識、過去の経験等の背景的知識を生かして、談話全体から意味を把握し聴き取っていく。

ところで英語を母国語としている人は、top-down processing でアプローチし、ことばを音や単語としてとらえるのではない。すでに習得していることばの規則性を駆使して意味を把握しており、もし意味の分からない単語に彼等が出くわした場合には、背景となる知識がその意味を推察する手助けになっていると述べている。(Anderson 1988, Nunan 1991)。そしてまた、O' Malley (1989)は、優秀な学生は top-down processing と bottom-up processing の両方を聴解の際に駆使することができるが、聴解の効果が見られない学生は、bottom-up processing しか使えないと述べている。したがって、聴解の訓練 (top-down processing 的訓練)をあまり受けていない学生にとっては、「聴き取り」の過程で、もしも知らない単語や語句などに出くわすと、戸惑い、混乱して談話が理解できなくなってしまうことになる。これらのことから、英語の聴解力の指導では、可能な限り top-down processing の訓練を行って、学生のスキーマを活性化させる必要があると言える。

IV. リスニングへの示唆と課題

リスニングについて共通して言えることは、リスニングは入力された音声情報に対して、聞き手が bottom-up processing, top-down processingの両面から積極的に働きかけながら、話し手のインプットした情報・意味を再構築していく能動的行為だと言うことである。

この理解をもとにリスニング・ストラテジーを考えると、まず、(1) 入力された音声言語情報の分析を行い、音の識別、聞き分けといった bottom-up processingの処理を通して、意味を構築する点に重きを置いたアプローチをする。(2) 積極的に予測と検証を行い、その背景的知識を活性化して、文脈など top-down processingで全体的な意味をとらえる点に重きを置いたアプローチをする。(3) bottom-up processingと top-down processing の両面を活発に行う inter-active なアプローチをする3つの方法が考えられる。かつて Audio Lingual Method を重視した時代には、正確に模倣することに重きが置かれていたために、音素の識別をさせ、正確な文法知識に基づいた文の構造、単語や文単位のディクテーションに終始し、談話全体から意味を推測するといった技術の習得にはあまり重きを置いていなかった。しかし、音声情報処理の視点からこのようにリスニングが、音声入力を聞き手が「予測-検証」しながら active に解釈していく過程として理解されるにつれて、聴解の手段としての「推測する能力」を正確に身に付けさせ、より効果的な「予測-検証」を行うという訓練が強く求められている。そしてそのためには、背景知識を活用しつつ

談話全体から意味を把握、推測する能力を養成するbottom-up processing的な聴解訓練を、積極的にリスニングに取り入れていかなければならないと考える。

おわりに

リスニングの養成で何よりも重視されなければならないことは、「積極的な意味形成」を訓練するための指導と方向性を志向したものでなければならないことである。学生は、現行の英語教育を通じてある程度の文法知識を持っているが、聴解の際にそれを有効に使えていない。つまり、学習した英語の文法や語彙は知識レベルとしてはあるが、聴解のプロセスにかかわるレベルまでにその能力が達していないということである。それに日本の学生は、文化的な背景知識が、英語圏で学んでいる学生と比べた場合に少なく、文脈の流れから談話全体の意味を推測するという能力が欠けていると考えられる。

これらのことから、その考えられる方向性としては、一方ではこのように知識レベルとして身に付いていない文法や語彙をもっと活性化し、「積極的に意味形成」をしていくことができるようにするためのbottom-up processing的な聴解の訓練を行う必要がある。

そしてその他方で、文脈の流れから談話全体の意味を推測するためのtop-down processing的な聴解の訓練を行って、学生のもつ背景知識の活性化を図るとともに、その処理技能を身に付けさせることである。こうしたbottom-up processing的な聴解とtop-down processing的な聴解を視野に入れたinter-activeな学習が有効で、生産的な学習法であり指導でもある。ひいてはそれが学生の聴解力を伸ばし、聴き取り能力の向上が期待できると考える。今回は、映像情報と英語聴解力について、聴解のプロセスとスキーマ理論や推測リスニングについて考察する。

【参考文献】

- 河野守男 1993.「コミュニケーションとヒアリングのメカニズム」小池生夫編『英語のヒアリングとその指導』大修館書店
- 安藤貞夫 1993.『英語の理論・日本語の理論』大修館書店
- 小池生夫(監修)1994.『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店
- 竹蓋幸生(監修)1995.『こうすれば聞こえるヒアリング』アルク
- 竹内 理(編著)2000.『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社

- Finocchiaro, M. and C. Brumfit 1983. *The functional-Notional Approach*. Oxford University Press
- Aitchison, J. 1987. *Word in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*.
Oxford: Blackwell
- Anderson and Lynch 1988. *Listening*. Oxford : Oxford University Press.
- O'Malley, M., J. Anna Uhl Chamot and Lisa Kupper 1989. "Listening
Comprehension Strategies in Second Language Acquisition." *In Applied Linguistics*, 1, 10, 4 .
- Richards, J. 1990. *The Language Teaching Matrix*, Cambridge : Cambridge
University Press, 50.
- Nunan, David 1991. *Language Teaching Methodology*. New Jersey:
Prentice-Hall.
- Vogely, A. 1995. Perceived strategy use during performance on three authentic
listening comprehension tasks. *The Modern Language Journal*, 79:1, 42-56
- Hardison, D. 1996. Bimodal speech perception by native and nonnative speakers of
English: Factors influencing the McGurk effect. *Language Learning*, 46:1, 3-73